

好感度カンスト王子と転生令嬢による  
乙ゲー・スピンオフ

## フェリシア

マローン公爵令嬢。  
おかん気質な世話  
焼きで人情は厚い  
が、うだうだ煮え  
切らないのは苦手。

## セラフィーナ

カムデン侯爵家令嬢。  
事なかれ主義な転生者。  
普段は猫ちゃんを被って  
いるが、内心では言いた  
い放題している。

## クリストファー

真面目で誠実な王太子。  
セラフィーナと婚約するこ  
とになるが、その愛の重さ  
は目を見張るものがある。

登場人物紹介

## 子爵令息

博識で学者肌で生真面目な性格。  
将来は医者になることを志している。

## 侯爵令息

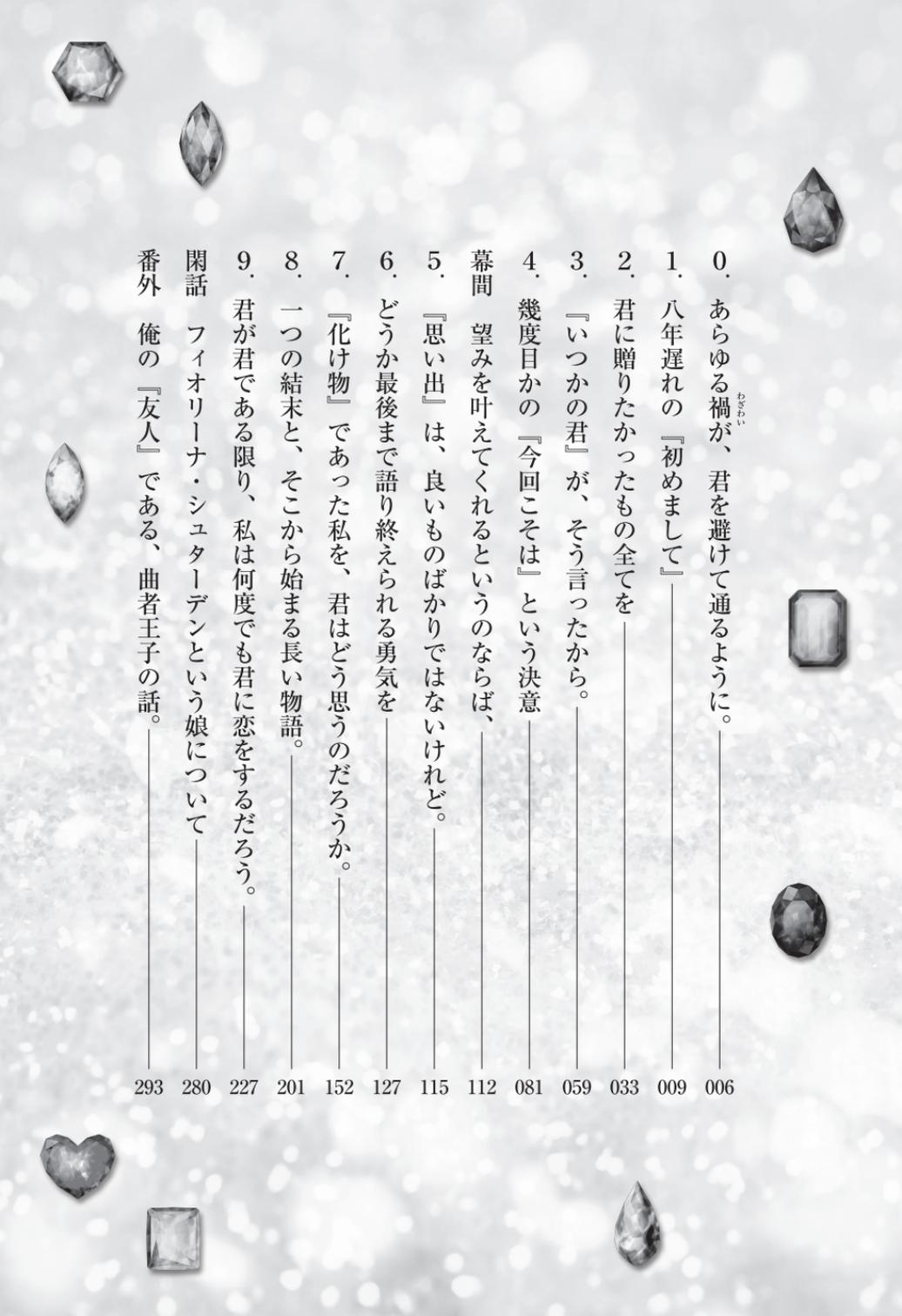
明るく人懐こい言動を良くしているが、利益にならない人間への見切りは早い。

## 公爵令息

他人を試すために皮肉を言うことが多いが、面倒見が良い。  
数人集まると、進行役になりがち。





- 
0. あらゆる禍わざわいが、君を避けて通るように。―― 006
  1. 八年遅れの『初めまして』―― 009
  2. 君に贈りたかったもの全てを―― 033
  3. 『いつかの君』が、そう言ったから。―― 059
  4. 幾度目かの『今回こそは』という決意―― 081
  - 幕間 望みを叶えてくれるというのならば、―― 112
  5. 『思い出』は、良いものばかりではないけれど。―― 115
  6. どうか最後まで語り終えられる勇気を―― 127
  7. 『化け物』であった私を、君はどう思うのだろうか。―― 152
  8. 一つの結末と、そこから始まる長い物語。―― 201
  9. 君が君である限り、私は何度でも君に恋をするだろう。―― 227
  - 閑話 フィオリーナ・シュターデンという娘について―― 280
  - 番外 俺の『友人』である、曲者王子の話。―― 293



## 0. あらゆる禍わざわいが、君を避けて通るように。

唐突に降りかかった理不尽に対して、私が抱いた感情は『無』だった。

やがて『それ』が現実であるのだと理解出来るようになって、無から生じたのは『絶望』であつた。

怒りは無く、憤りでも無く、悲しみも無く。

ただひたすらに、『もう還かえらない』という事実に対する虚無感と絶望だけがそこにあつた。

この先どれ程の時間が経過しようとも、そこに君は居ないのだと。

絶望の果てに君に出会い、『今度こそ』と祈るような気持ちと、小さくはない『希望』を見出した。

低い場所から落ちるより、高い場所から落ちた方が痛みは大きい。そんな当たり前の事を考えもせずに。

見出した『希望』が明るければ明るい程、大きければ大きい程に、それが潰つぶえた時の痛みは増大する。

——『痛み』など、もう感じなくなっていた。

ああ、またか……と。それでも駄目なのか……と。

真っ暗な沼に、音もなくゆっくりと沈んでいくような感覚だけがあった。

手足を搦め取る沼の水は刺すように冷たく、身動きを取ろうという気力をも奪っていく。

けれど、もうそれでいい、と。

身を任せて沈み切ってしまったえば、全てを終わりに出来るのではなからうか、と。

生き続けるという事も、その為に足掻く事も、もうどうだって良いのではないだろうか。……ど

うせ、何をどうしたところで、君はいつも理不尽に奪われてしまうのだから。

そんな結末を見る為に、私は生きている訳ではないのだし。

もう全て、どうだって良いのではないだろうか。

だというのに、また『アレ』は私に言う。

『これで最後だ』と。そして『全てをやり直そう』と。

その言葉を問い質すような気力もなく、また問いを発するだけの時間的な猶予も与えず。『ア

レ』は何と身勝手な存在なのだろう。

やり直すと申したくせに、状況が大分おかしい。

分からない事だらけだ。

分からない事だらけだし、やらねばならない事だらけだ。

けれど一つだけ、言える事がある。

もしも世界の何処かに君が生きているのなら。その可能性が、砂粒一つ程度でもあるとするのなら。

私はまた、持てる全てを使い、足掻き、抗ってみせよう。

君が今度こそ、平穩に、幸福に生きていけるよう――。

私が願うのは、ただそれだけなのだ。



## 1. 八年遅れの『初めました』

多分コレ、乙女ゲーム転生だ。

物心つき始めの頃、そう思ったのだが。

ゲームはかなりプレイする方だ。

一番プレイ時間の長いゲームは、総プレイ時間が二千時間を超えている。しかも完全オフライン、スタンドアロン形式のRPGだ。MO? MMO? なんてゲームでまで他人に気を遣わねばならぬのだ。意味分からん。

一人で黙々と、好きな世界で好きな事をしているのが楽しいのに。

PVP? ざけんな。相手が中身入りの人間じゃ、グリッチも使えねえだろうが。白い霊体からの緩いオンライン要素ならアリだが、ガッツリ『対人間』なゲームはお呼びじゃねえ。

そんな感じで、寝る、食事を摂る、仕事をするなどの時間以外は、ほとんど殆どゲームをしていた。まあ後は、マンガを読んだりネットサーフィンをしたりもするけれど。

このようにゲーム大好き人間であった私だが、手を出さないジャンルのゲームはあった。

『恋愛』を主軸に置いたゲームがそれだ。

オープンワールド系のRPGなんかでも、恋愛イベントが存在するものは多い。……が、私はそれらイベントは、『やらなくていいなら、絶対に手を付けたい』性質<sup>たち</sup>だ。

何故なら、面倒くさい。

私は一人で野山を駆け巡ったり、農業に勤しんだり、建築に精を出したりしたいのだ。

恋人や伴侶ときゃっきゃしたい訳ではないのだ。

恋愛イベントや結婚イベントのあるゲームでは、一度だけそれらイベントをこなし実績を解除した後は、即座に新しいキャラで新しい周回を始めるのが私だ。

……家に帰ると伴侶が居るとか、ちよつと嫌じゃね？ 私が頑張って入手した家なのに！

いや、あくまでも『ゲームの話』よ？ 現実とは別よ？

そんな人間なので、『乙女ゲーム』などの『主軸が恋愛』というより、『もはやそれしか目的がない』みたいなゲームは全スルーで生きてきた。

ミステリ要素などでもあつてくれたら、まだプレイするかもしれない。ほぼミステリ要素で構成されている、白馬村のペンションで起こる惨劇のノベルゲームなどは、普通に面白かったし好きだからだ。ストックで彼女にさつくり刺殺された思い出が蘇るわあ……。

自身でプレイした乙女ゲームは一本もない。

男性向けエロゲは何本かプレイした事がある。何故なら、『ストラテジー＋エロ』とか『シミュ

レーション+エロ』のように、何かのゲームにエロいイベントがくつついているだけ、みたいなゲームが結構あるからだ。

そして私は、プレイするゲームに『ストーリーの面白さ』を殆ど求めていない。長いイベントシーンなどがあると、一周目でもスキップしたくて仕方ない気持ちになる。

そんな人間なので、『ストーリーを読ませる』ノベル系ゲームとの相性がすこぶる悪い。ストーリーの出来が良いだとか、謎が散らばって先が気になる！ だとかの場合は別だが。

さて、そんなプレイスタイルのゲーマーであった私が、何故自身が『乙女ゲーム転生』なるものを果たしたと分かるかというところ。

とても人気があつたらしい乙女ゲームの、コミカライズ版を読んだ事があつたからだ。

実際のゲームであれば攻略対象が数人いて、誰を攻略するかでシナリオが分岐していくのだが。

コミカライズでは、恐らくメインルートであつたのであろう王子とヒロインとの恋物語だけに焦点を当てていた。

何というか、突っ込みたい気持ちを堪えるのが大変なストーリーだった。

そもそも全くそういうゲームに興味のない私に、友人が無理やり押し付けてきたのが、件のコミックスだ。

絵はめっちゃ綺麗で見やすかった。キャラデザをやった少女漫画家さんが、そのまんまコミカラ

イズを担当したらしい。すごい綺麗な絵だし、コマ割りも見やすいし、背景なんかも丁寧に綺麗だしで、その漫画家さんのオリジナルのマンガを買ってしまった程だ。オリジナルの方は文句なしに面白かった。

「すごい王道のキュンキュンするお話だから、読んでみて！ で、気に入ったらゲームも貸すから！」

友人はそう言ってマンガを貸してくれたのだ。

ファンを増やしたかったのだろうが、私にとっては逆効果でしかなかった。

何故なら、メインの王子にしろヒロインにしろ、読んでいて「アホ程ウゼ……」としか思わなかったからだ。

まあ、お気に入りの漫画家さんを一人見つける事は出来たので、その点に関しては友人に感謝している。

その、唯一内容を知っている（王子ルートだけが）乙女ゲームの世界に転生したらしい。

物心ついた頃に、王太子殿下のご尊名を知り、「あいつた……」と思ったのだ。

だがしかし、だ。

私が読んだマンガに、現在の私に該当するキャラは居ない。

という事は、だ。

モブ転生。いや、物語に登場すらしていないのだ。モブ未満だ。

『ストーリーに全く関係ない転生』だろうか。それすなわち、単なる『異世界転生』なのではないだろうか。

しかも王太子殿下は、私より七つも年上だ。絡む要素すらない。

多分、メインの攻略対象が七つ上って事は、ヒロインもそんなくらい上よね？ 他の攻略対象の人も。もう世代違うくらい歳の差あるから、まず関係ないよね？ 転生した家がやたら爵位高いけど、そんなの偶然だよな？

私の前世の徳が高かったから、良いお家に転生できただけだよな？

……徳など積んだ覚えはないし、多分あったとしても相当低いだろうが。

……ハっ!? もしや、殺すに忍びなくて、見つける度に窓から外へぼいっとしていたクモたちの恩返しだろうか!? ……いや、『窓からポイ』では恩は売れないか……。

まあ、爵位の高いお家のご令嬢に転生してしまったのだから、後は両親の提示するルートにしゅくく粛々と乗っかり、貴族令嬢としての務めを果たすのみだな、と思っていた。



「婚約？」

「ああ。……まだ早いと思うんだがな……」

父に呼び出され、何の用かと思ったら、「婚約が決まった」と告げられたのだ。

現在、私は六歳だ。日本人の感覚からしたら、相当に早い。

子供同士が「おつきくなったら結婚する」と戯れに言っているのと違い、こちらはきちんと大人が決めた話だ。

だがこの世界の結婚適齢期は、男女ともに十代後半だ。あと十年ちよつと思えば、そう早い話でもないのかもしれない。

「お相手はどなたなのですか？」

父に訊ねると、父は「ふー……」と溜息をついた。

溜息をつくような相手なのか。それとも単純に、娘に早々に相手が決まってしまい、面白くないだけなのか。……この父に、そんな感傷があるのかという点はさておき。

「お相手は、クリストファー殿下だ」

……ん？

「お父様、すみません。もう一度よろしいですか？」

聞き間違ひかな？　なんか、あり得ない名前が出てきたけども。

「セラの婚約者となったのは、王太子クリストファー殿下だ」

私に言い聞かせるように、ゆっくりと、一音一音をはっきりと発音するお父様。

これはどうやら、聞き間違いなどではないらしい。流石に「もう一回」とは言えない。

いや、マジすか……？ 王太子殿下って、乙ゲー攻略対象の『アレ』でしょ？ 脳内に広大なお花畑をお持ちの、「国政？ 何それおいしいの？」みたいな、後ろ頭ぶん殴りたくなるあの……。

そして、それ以前にだ。

「王太子殿下は、私よりも七つ年上だったかと記憶しているのですが……」

別に、歳の差のある夫婦はそう珍しくもないが。

王太子殿下となると、話はちよっと変わってくる。

王族なのだから、あちらが好きに相手を選べる立場だ。しかも、王の成婚や王妃の懐妊に合わせ、貴族の間でも結婚ラッシュやベビーブームが起こるのだから、殿下と歳の近い貴族の令嬢や令息は非常に多い。

その中から、何故に七つも年の離れた私を？ しかも我が家は、穏健・中立派だ。取り込んで、さほどの得にならない。派閥としては極小というか、我が家に追従する家は二つくらいしかない。派閥などないに等しい。

となると、可能性としては――

「もしや……、殿下は幼女がお好きだとか……」

「セラ、それは思っても黙っていなさい」

口元に指を立て、お父様が軽く片目を細められる。

ていうか、お父様もそう思われたのですね……。

しかし、殿下が特殊な嗜好しこうをお持ちの場合、問題が生じる。

そう。私は今でこそ愛くるしい幼女だが、時間の経過とともに麗しい淑女へと変貌を遂げる事になるのだ（希望的観測込み）。そうなった時、殿下はどうするつもりなのだろう。

勿論、『イエス、ロリーター！ ノー、タッチ！』をスローガンに掲げる、とてもジェントルな変態である可能性もある。……紳士であろうが、変態は変態だが。

だがそうだった場合にしても、私を婚約者に据えるメリットが特にない。あるとすれば、可愛い盛りを間近で見られるくらいか。

「私が麗しいレデイへと成長した頃に、婚約話が立ち消えになったりするのでしょうか……？」

「麗しくは成長しそっだが、きちんと『淑女』レデイとなるかどうかは怪しいと言わざるをえんな」

クツ……！ お父様、お厳しい……！

「殿下は私に向かって、不誠実な真似は絶対にしないと、ご自身と国の名に懸けて誓ってくださいました」

何故、そこまで……。

「私の美貌に、目が眩くらまれたのでしょうか……？」

「……六歳児の美貌に眩くらむような目なら、潰つぶしてしまった方が良さそっだが」

お父様……！ 本当に手厳しくていらっしやる……！

「それ以前に、お前は殿下とお会いした事もなからう？」

「そうですね」

そんなんだよね。こちらは一方的に知っているが。

何といっても、自国の王太子だ。次代の王だ。「知りませんでしたあ」で不敬を働く訳にいかないのだ。

が、向こうからしたら私など、『自国の貴族の令嬢』でしかない。ほぼ有象無象の一員だ。しかも、政治的に重要な家という訳でもない。

爵位こそ高いが、我が家は政治の中枢などには居ない。むしろ、国政にはほぼ関わっていないポジシヨンの家だ。

殿下が私に目を留める理由は何だ？

………考えれば考える程、殿下が幼女趣味である可能性が強まるばかりだ。

「来月、殿下がこちらへご挨拶に来られるそうだ。エレナと相談して、準備を整えておきなさい」

「は？ ……こちらがお城へご挨拶に上がるのではないのですか？」

王太子がホイホイ城を空けるの、どうかと思うし……。

「殿下がそう仰られたのだ。向こうが無理を通した話だ。出向くのが礼儀だろう、と」

「……無理を通してまで、何故、私を……」

「考えても分からのだから、考えるな」

さてはお父様、既にこの件に関して思考を停止していますね……？

とはいえ、考えても分からん事は確かだ。ここは私も、ちょっと思考停止しておこう。

何といっても、私は王太子殿下ご本人を全く知らないのだ。もしかしたら、ジェントルな変態ではなく、ガチものの可能性もある。

いや、変態でない可能性もあるか。あるか……？ ある、かも、な……？

「お断りなんかは当然……」

「無理だな。幸か不幸か、お前になんの瑕疵かしもない。いや、なくもないが、取り敢えず目立った瑕疵はない」

……何故言い直すのです、お父様……。そこはただ『ない』でいいじゃないですか……。

「この珠たまのような美幼女に、瑕疵かしなどあろう筈がないでしょう」

「そうだな。球たまのような娘だな……」

ん？ 何か、私とお父様で『たま』という言葉にニュアンスの違いがあった気がするぞ？

「ところでお父様」

「何だ？ 球よ」

……娘を『たま』呼ばわりはどうかと思いますが。猫じゃあるまいし。

「王太子殿下は、どのようなお方なのでしょうか？」

私を知るのには、精々が公式なプロフィール程度だ。ご尊名やご尊顔、生年月日（国の祝祭日に

なってるしね) くらいのものでしかない。

為ひととなり人なんかは、全く知らない。どうせ絡む事も噛む事もなかるうと、全く興味の外にあったからだ。

「見目麗しい方だな」

とりあえず、という風情で父が言う。

「絵姿の何掛け程度ですか？」

「……セラ、『不敬』という概念を知っているか？」

「知識程度に」

頷いた私に、父が深い深い溜息をついた。

「大丈夫です、お父様。私とて場を弁わきまえる程度の知恵はあります」

「本当か？」

「お疑いになられるのですか？」

「……逆に問うが、ならんとも思うのか？」

「お父様は私の被る猫を過小評価しておいでです。それはそれは毛並みの良い、つやつやの可愛らしい猫ちゃんを被れます」

「……その、無駄に良く回る舌が信用ならんのだが……」

また溜息！ しかもさつきより深い！

「殿下はとても真面目なお方だ。見目は、絵姿そのままと思っておけ」

「王族への忬度そんたくで割り増しがあるのでは？」

「つやつやの猫はどうした？」

「昼寝中です」

猫は『寝る子』だからね！

「……当日お前は最低限以外、口を開かんでいい。初顔合わせが不敬で断罪など……ちよつと面白いが、中々に情けない話だからな」

『ちよつと面白い』とか、本音タダ漏れてますけど……。確かに、ちよつと面白いけど。

しかし『断罪』とか、乙女ゲーム転生っぽい単語キタね。ヒロイン苛めとかでも何でもなく、初顔合わせで不敬により断罪！ やべえ！ マジでちよつと面白え！

「当日は、風邪を引いて声が出ないという設定でいくか」

そんな！ お父様！ 私がちよつとワクワクしたからって！

「折角いま、ちよつと殿下との顔合わせに対して前向きになりましたのに！」  
食ってかかった私に、お父様がまた溜息をつかれた。

「前を向くなら、真正面を向け。斜め前方向を向くんじゃない」

チッ。流石は父親だぜ……。まるつとお見通しってか……。

「声が出ない設定が嫌ならば、つやつやの可愛い猫とやらをきちんと被れ」

「はい……」

まあ、端はなからそのつもりだけでも。

しかし、王太子殿下の婚約者かあ……。

家格からいえば、何もおかしな事はないけど。

あ、申し遅れました。わたくし、セラフィーナ・カムデンと申します。カムデン侯爵家の娘でございます。

国に八つある侯爵家の、序列で言えば四位でございます。

上から数えた方が早いレベルの家格なのだから、王太子殿下の相手としておかしな事は（色々あるけど）特にない。

ていうか、前世で読んだマンガ、王太子に婚約者なんか居なかったけど……？ 夢見がちな少年少女が、夢見たまんま突っ走るようなマンガだったんだけど……。

お父様、殿下の事「真面目な方」って仰ってたしな……。

……まあ、マンガはマンガか？

殿下が真面目な方で、且つ変態でもないなら、私に断る理由はないしな。



お兄様の副音声、うるせえなあ……。

私が美幼女であるように、兄も兄で美少年だ。が、よわい齡十一にして、この兄は中々歪んだ『イイ性格』をしている。

恐らく、父に似たのだろう。いや、お父様は別に悪い人じゃないけども。……絶対に『善人』でもないけど。

兄は当然だが同席はしない。

王太子殿下との面会に臨むのは、私と父だけだ。

……とはいえ、どうせお兄様、どっかから覗いてそうだけど。自分基準で『面白い事』が大好きな人だし。

今日は初夏でお天気も非常にいい。なので、庭の木陰にテーブルをセットしてある。

どこからでも覗き放題だぜ！

しかし残念だったな、お兄様よ！ 私の猫ちゃんは、今日は絶好調だ！

王太子殿下よ！ どこからでもかかって来い！

そんな空回り気味の気合いを入れ、王太子殿下のご到着を待つ。

ええ天気やなあ……と、ぼけーっと待つ事しばし。王家の紋の入ったごうしや豪華な馬車が、騎士様の馬に先導されやってきた。

ていうか、派ッ手だなあ、おい！ いやまあ、正式な訪問だから当然っちゃ当然だけでも。

因みに我が家は、派手派手しいものを好まない性質の人間ぞろいなので、馬車も非常に地味である。父曰く、「地味すぎて夜会なんかでは逆に目立つ」のだそうだ。

「可愛いつやつやの猫の準備は大丈夫か？」

並んで立った父が、ほそつと小声で言ってくる。

「準備万端です。どこからかかってこられても迎え撃てます」

「……お前は何と戦うつもりだ？」

「それくらい的心づもりで臨んでいる、という話です」

父はただ深い溜息をつくだけで、もう返事もしてくれない。……そんな態度じゃ、娘がグレちゃうぞ？

遠目に見てもそれと分かる王家の馬車が、ゆっくりとスピードを落とす、門からのアプローチを悠々と玄関前までやって来る。

二頭立ての馬車だが、流石は王家所有だ。引く馬もとても立派な体軀で毛並みも美しい。装具もえらい高級感がある。

まあ、こういう箔付けて大事よな。頂点たる王族が侮られちゃ話になんないし。

父の目線が「余計な事は言うな、するな」と訴えてきているのが分かる。

お父様、ご自身の娘に対して信用がなさすぎでは？

素晴らしく調教された馬が、足並みを揃えて御者に従い歩みを止める。そこに従僕がフットステップを用意し、馬車の扉前に設置して扉を開ける。

それに合わせ、私と父は深々と頭を下げる。カーテシーなんかは、めっちゃ練習したからちょっと自信がある。

前世の私の人生に余りに縁のない所作なので、ちょっと面白かったからだ。あと、礼儀作法は出ていて損は絶対にならない。

殿下の足音が聞こえる。音だけならば、きびきびとしているようだ。顔を上げて歩く姿を見たいが、それが出来ないもどかしさよ。

父と私の前で足音が止まり、静かで穏やかな声でした。

「二人とも、顔を上げてもらえるだろうか」

……あれ？ 何か意外と、下手に出るんだな？ もうちょっとこう、支配階層らしい上からの声掛けになるかと思ってたのに……。

お声に合わせて、父と二人、下げていた頭を戻す。

あらあ……。

絵姿まんまの美少年だわあ。

私より七つ年上なので、今年で十三歳の筈だ。その年齢より、幾らか大人びて見える。……まあ、日本人基準からしたら、こちらの子供たちはそもそも大人っぽく見えるのだが。

色味の薄い金の髪は、プラチナブロンドというのだろうか。さらっさらで、陽光にうっすら輝いてすら見える。少年らしい線の細い、けれどひ弱そうには見えない体に、すらりと長い手足。今日は略式の礼装をお召したが、とても良く似合っておられる。

色白だが決して不健康そうに見えない肌は、毛穴をどこにやったのか問い詰めたレベルでぴっかぴかだ。……乙女ゲームのヒーローにして少女漫画のヒーローには、毛穴など存在しないのだろうか……。

ヘイゼルの瞳は、陽光の加減だろうか、緑や青が混じって見える。宝石のような瞳だ。

当然、お顔の全てのパーツは完璧なバランスで配置されていて、文句のつけようのない美貌だ。

……正直、すまんかった。

絵姿なんてどうせ、『王族付度フィルター』というSNSもびっくりの最強の画像加工ツールによって、上方修正されているものとはかり思っていた。

が、生身の存在感がある分、実際の殿下の方が絵姿よりも美しい。

「わざわざのお越し、恐悦に存じます」

頭を下げる父に倣い、私も再度頭を下げる。

「いや、無理を言ったのはこちらだ。礼を言うべきは私だろう」

殿下の言葉に、父と揃って身体を起こす。

何ていうか、言葉遣いとかめっちゃしっかりしてるな。マンガのイメージと大分違う。でももし

かしたら、原作であるゲームの方とマンガとで、ちょっと違っていたりとかするのかも。……でもあんまり改変しちゃったら、ファンから文句出るよな……。

良く分かん。

良く分かんが、マンガの『夢見る花畑王子』よりは好感が持てるので、良しとしよう。

場所を移動し、セットしてあるテーブルへとつく。

我が家の庭はちよつとしたものだ。イングリッッシュガーデン風と言えば聞こえがいいが、色々な植物が雑多に植わっている。イングリッッシュガーデンは決して『雑多に植えている』訳ではないだろうが、造園の知識のない私からしたら「なんか色んなのがわちゃつと植わってる」というイメージだ。……お好きな方には土下座して謝っておこう。申し訳ない。

この我が家の庭は、植生を考慮したとか、景観を重視したとか、そういう事は一切ない。ただただ雑多な庭だ。しかも広大なので、ちよつとした野原だ。

……王太子殿下をお通しするのに、これで良かったのだろうか……。庭を会場としてチョイスしたのは母だが、本当にその判断は正しかったのだろうか……。

殿下は何やら物珍しそうに周囲を見ておられる。……お城の庭は、さぞかし美しいでしょうからね。この野生の野原感は珍しいだろう。というか、貴族の邸宅の庭として、かなりアウトな部類の庭だろう。

だが、他に類を見ないという一点においては自信がある！ ……間違ってる感がひしひしとするが。

「何というか……、個性的な庭園だな」

微笑んで仰る殿下。

大分言葉を選んでくださったようだ。気遣いが出来る。これは中々の加点对象だ。

「お気遣い、痛み入ります」

父が深々と頭を下げている。しかしテーブルの下では、父の足が私の足を蹴りつけている。

……角度的に、殿下の護衛の騎士様とかには見えちゃってんじゃないかね？ 別にいいけど。

父の蹴りの理由は、この庭のごちゃっと感がほぼ私の仕業という一点に尽きる。

異世界の初めて見る野菜やら果物やらが面白く、種が採れたものをバカスカ庭に植えまくったのだ。

そしたら意外とフツーに芽が出て成長してしまった。しかも現在は、勝手に増殖している。季節とか土壌とか、なーんも考えずに植えたんだけどなあ……。遅たくましきかな、植物。

庭師たちは、途中から『美しく整える』という作業を放り投げてしまった。現在の彼らの職業は、殆ど『農夫』だ。美味しい野菜と果物を育てる事に熱心だ。

それでもきちんと、季節の花々が植わっている区画もある。……野菜に浸食され始めてはいるが、野生の原野感満載の庭をちよっと奥へ行くと、美しく整えられた畑がある。……間違っている感じ

かない。

王太子殿下はそんな庭からこちらに向き直ると、私に向かつて微笑んだ。

「まずは、挨拶を。クリストファー・アラン・フェアファクスだ。こちらの一方的な提案を受け入れてくれた事、感謝している」

「勿体ないお言葉でございます。カムデン侯爵が娘、セラフィーナでございます。拜謁出来まして、光栄でございます」

「こちらこそ、会えて嬉しい」

……声がマジで嬉しそうなんだよな……。何でだ？

下げていた頭を戻すと、微笑む殿下とバッチリ目が合った。理由は分からないが、その笑顔は既に何か『愛しいもの』を見るような愛情に溢れている。

……なんか、殿下の私への好感度、初対面にしちゃ高くない？ やっぱこの人、ジェントルな変態なのかな……？

「セラフィーナ嬢」

「はい」

呼びかけられて返事をしたただけなのだが、殿下が何やら嬉しそうに微笑まれる。……言っちゃ何だが、ちよつと怖い。

隣のお父様をちらりと窺うと、お父様も僅かに怪訝そうなお顔をされている。そうなりますよね。

「貴女を『セラ』と呼んでも、気を悪くしないだろうか？」

「どうぞ、ご随意に」

婚約者となったのだから、何事もなければいずれば夫婦となるのだ。他人行儀であるよりは余程いい。……ちよつと、距離の詰め方が早い気もするけど。

ていうか、愛称で呼んでもOKよと承諾しただけなのに、やはり殿下がめっちゃ嬉しそうだ。

マジで何なの？ 何で殿下、そんな好感度高いの？ そんなにこの珠のような美幼女がお好みなの？

「可能であれば、私の事はクリスと呼んでもらえないだろうか」

「承知いたしました、クリス様」

「ありがとうございます」

ううう……ん……。

何なんですか、殿下。その、眩しいものを見るような笑顔は。

お父様！ この王太子、何か怖いんですけども！

そんな思いで父を見ると、父は「堪えなさい」と言うように小さく頷いた。

……初手から好感度高いって、悪い事じゃないんだらうけど、こんなに居心地悪いものなのか……。

しかもそれが何に由来してるのかさっぱりだから、余計にだ。



この開幕スタートダッシュの理由、いつか分かるのかな……。その『理由』が、殿下は幼女がお好きとかいうんでなければいいけどな……。

多少の（というかむしろ多分の）不安を抱えながらも、クリスマス様との初顔合わせは何とか無事に終える事が出来たのだった。

……ついでに、何のトラブルもなかった事を、兄に「らしくないぞ☆」と言われイラっとするのだった……。



## 2. 君に贈りたかったもの全てを

乙女ゲームの世界（多分）に転生したらしいのだが、色々とメインヒーロー様の様子がおかしい。そもそも、そのゲームを全くプレイした事のない私の感想なので、実際にプレイした人からしてみたらおかしな事など何もないのかもしれないが……。

こういう時、日本が恋しくなる。

現在の私の疑問も、『急募』○○ってゲームやった事あるヤツ、ちょっと来い』とでもネットで呼びかけたら、きつと優しい賢者たちが数人は集まって教えてくれる筈だ。

だがこの世界にそんなものはない。『掲示板』つつつたら、当たり前だが木で出来た板だ。

ゲームを原作としたマンガでは、王太子殿下は十八歳だった。主人公であるヒロインちゃんは一つか二つ年下だった筈。『年下』という事以外、詳しい事は覚えていない。

まあ、まだ乙女ゲームは開始前なのは確かだ。

そんな乙ゲー・メインヒーローであるクリス様の様子が、どうおかしいかと言うと。

まず、クリス様の距離の詰め方と囲い込み方がエグい。

初っ端しよばなから好感度がめちゃ高で、それだけでも「ええ……（引）」てなったのだが。初対面の数日後、早速『婚約成立の記念に』と贈り物が我が家に届いた。

私はダークブラウンの髪に、深緑の瞳というカラーリングだ。どうでもいいが、兄も全く同じカラーリングをしている。父譲りの色合いである。

クリス様から『記念に』と贈られてきたのは、私の髪に良く似た色の黒檀こくたんと、瞳に良く似た色のエメラルドを使った、王太子の象徴花であるダリアの意匠の髪飾りだった。

何やら執着と独占欲が垣間見え、家族全員で「うわあ……」となってしまった。……というか、届けられた箱を開けてみて、全員で「うわあ……（ドン引き）」と言ってしまった。

お父様がちょっぴり虚ろな目で「良かったな、セラ」と棒読みで仰っていた。私の返事も「ソウデスネ」と見事な棒読みになってしまったのは仕方のない事だろう。

どうやら私に対して執着だとか何だとかがあるらしいクリス様だが、それ以外にもマンガと違い過ぎていて訳が分からない。

マンガでは、それはそれは尊大なお方であった。

王太子であり、幼い頃から周囲に持ち上げられて育ったが故に、世間知らずで我が強い。まあアレだ。世に言う『俺様タイプ』だ。

その俺様王太子様が、ヒロインちゃんと出会い変わっていく……という、確かに王道な話だった。恐らく、原作であるゲームでもそういう展開なのだろうと思われる。

だがまだ、ゲーム開始前だ。

ヒロインちゃんの名前なんかはこれっぽっちも思い出せないのだが、多分、クリスマス様とヒロインちゃんはまだ出会っていない。何故ならヒロインちゃんの境遇は、よくある『当主となる筈だった嫡子が、平民の女性と恋に落ち出奔<sup>しゅっぽん</sup>』。ヒロインちゃんが生まれてすぐに彼は亡くなり、ヒロインちゃんは己の出自を知らずに市井で伸び伸びと育つ』という設定だからだ。

そして『母親が病気で亡くなり途方に暮れている所に、父の生家である伯爵家から迎えが来て、一夜にして平民から伯爵令嬢となる』みたいなアレだ。

そのヒロインちゃんのお母様が亡くなってしまふのが、ヒロインちゃんが伯爵家の養女となる直前だった筈。つまり今ヒロインちゃんは、まだ出身地の農村で伸び伸びと暮らしている筈なのだ。

そのヒロインちゃんと出会ってから、クリスマス様は変わられる筈なのだ。

今はまだ出会ってすらない筈なのに、クリスマス様には『俺様』の『お』の字すらない。とても穏やかで優しく聡明な方だ。

ただもしかしたら、ゲーム開始が近づくにつれ、今のこにこ穏やかなクリスマス様が俺様へと変化していくのかもしれない。

何だそれ。最悪じゃねえか。

そんな事にならないといいな、と心から願うばかりだ。

そんなこんなで、婚約成立から半年。

国内の貴族を集め、婚約披露パーティーが開かれる事になった。

まだ、私には何の教育も施されていない。いや、今まで家でやってきた分はあるけれども。『王族となるにあたって』的な教育はまだだ。

クリス様は何故か「セラなら大丈夫だよ」と、謎の信頼を寄せて下さる。何を根拠に言っているのだろうか。というか、簡単にクソ重い信頼なんかを、私の肩に乗っけるのはやめてくれないだろうか。

クリス様の謎のクソ重たい信頼に、多少なりとも応えるかあ……と、お城でマナー講習を受けてみた。

講師を務めて下さったのは、さる侯爵夫人だったのだが、「特に問題なく見受けられます」と言われた。ホントっすかね？ 私、公衆の面前で大恥かいたりしませんかね？

そう言うと、夫人は「セラフイーナ様の年齢を考えましたら、むしろ出来過ぎている方かと」と微笑んで仰って下さった。

「そうっすよね！ 何といっても、私、まだ六歳ですもんね！ ちょっとくらの失敗なら、微笑ましく見てくれますよね！」

そんな風に開き直る事が出来、ちょっと心が軽くなった。

……いや、開き直るだけじゃなくて、マナーなんかはちゃんとやるつもりだけでもさ。でもまさか、自分が王太子妃に……なんて、考えもしなかったからさ。「それなりに出来てりゃいいで

しょ」くらいの気持ちでいたんだよね……。

これからは、ちよつと心を入れ替えて、真面目に取り組んでいかねばなるまい。普段被っているつやつやの毛並みの猫ちゃんも、更なるブラッシングが必要だろう。つやつやのサラッサラのふわふわに仕上げてやろうじゃないか。

さて、これからはそれでもいいとして、まあまずは目先の婚約披露パーティーだ。

そのパーティーでは、本当なら私とクリスマス様によるダンスが披露される筈だった。

実はダンスにはちよつと自信がある。

私は身体を動かす事が好きなのだが、お貴族様のご令嬢に生まれてしまったので、運動などが余り出来ないのだ。折角、無駄に広大な庭とかあんのに！ 任せてくれたら、庭の畑仕事もやるのに！

そのフラストレーションを発散するのに、ダンスはとても良かった。レッスン中なら、ちよろちよろ動き回っても叱られないのだ。素晴らしいではないか。こんなのもう、張り切っていくしかないじゃないか。

そういうった経緯もあり得意なのだが、パーティーでのダンスは中止となった。

理由は、私とクリスマス様の体格差だ。

十三歳（日本でいうなら、中学一年生）と六歳（未就学児）では、基本姿勢からおかしな事に

なってしまうのだ。見た目は完全に「子供のお遊戯に付き合うお兄さん」だ。

一応やってみるだけやってみるか……と、クリスマス様と二人でのダンスのレッスンをやる日があった。

思い切り前屈みになるクリスマス様と、クリスマス様にぶら下がるような格好になってしまう私を見て、講師の先生が苦笑いで「今回は無しにいたしましょうか」と仰ったのだ。

二人によるダンスがなかったとしても、参加者の方々も事情はすぐに察してくれるだろうし、と。ダンスがない事は、私としては「まあ、そつすよね」くらいの気持ちでしかなかったが、クリスマス様が非常に残念がっておられた。

そして、『無しで』と決定されると、少しだけしゅんとしてらした。

……そんなにダンスやりたかったんすか？

不思議に思いつつクリスマス様を見ていると、クリスマス様は私に気付かれ「残念だけれど、『いつか』の楽しみにとっておこうか」と微笑まれた。

そうですね、と返したらば、えらく嬉しそうに笑われるものだから、何だか面食らってしまった。  
……この人、マジで、何でそんなに私の事好きなの……？

『いつか』クリスマス様と踊れるようになる頃には、私はそれなりの年齢になっている筈だ。という事は、クリスマス様はもしやロリコンではないのでは……。

だといいな、というちょっとした希望が芽生えた日であった。

そんなこんなで、パーティー当日である。

私がお子ちゃまである事を考慮し、夜会ではなく、夕方から夜にかけての開催時間となっている。ありがたいことですよ。お子ちゃま、夜になるといきなりスイッチ切れて眠くなるからね。

私が健やかに成長する為にも、そういった自然の摂理には逆らわない事になっている。睡眠、大事。

開始時刻は夕方なのだが、私には色々準備がある。なので、昼過ぎにはお城に居た。

私だけでなく、マイマザーと我が家の侍女も同伴である。お子ちゃまでは分からぬ事などは、母が対応してくれるらしい。頼もしいです、お母様！

ドレスやアクセサリーなんかは、お城の方で用意してくれるという話だった。事前に採寸だけされた。……果たして、どんなドレスが出てくるのか……。

お城の侍女さんに案内され、小さな部屋に通された。ここで諸々の準備をするらしい。部屋の中には、準備を手伝ってくれる侍女さんが四名ほど待機している。

着付けやヘアメイクをしてくれる人々だ。どうぞよしなに。

互いに挨拶し合い、「では早速ですが、セラフィーナ様が本日お召しになるドレスを……」と、部屋にあった衝立の奥へと案内された。

そのドレスを見て、私と母は思わず真顔になってしまった。

ものすごい綺麗なドレスだ。胸の下あたりの高い位置で切り返しのある、所謂『エンパイアライン』という形をしている。エンパイアラインのドレスは大抵、肩やデコルテを大きく出したデザインのものが多いのだが、着用者の私がお子様である事を考慮してか、その辺りは出ないようなデザインになっている。……お子様のデコルテやら背中やら、出してもしょうがないしね……。

色合いは、淡いグリーンから、裾にかけて群青のような濃い青色へと変化していくグラデーションになっている。このグラデーションの染色技術は、最近開発されて売りに出され始めているもので、今ちよつとした『最先端の流行』となっているものだ。

そしてスカート部分には、美しい金糸でたっぷり蔓薔薇が刺繍されている。蔓薔薇ですよ！蔓薔薇！！

この『蔓薔薇』という意匠は、恐ろしい事に『王太子妃（または王太女配）の象徴』として用いられるものだ。そしてその身分にある者以外がこの意匠を用いると、その人は「常識がない」とヒソヒソされてしまうものでもある。

確かにいざれ王太子妃となるのかもしれないが、私は未だ『婚約者』でしかない。そして今日は、それをお披露目する会だ。『王太子殿下の婚約者』としてのお披露目で、既に『王太子妃の象徴』

のついたドレスを着るとか……。ぶっちゃけ、「ないわー……」という気持ちになる。

デザイン自体はめちゃくちゃ綺麗なんだが、このドレスは本当に私が着て良いものなのだろうか……。

王太子妃という椅子に色気のある人々から「あちらのお嬢さんは、既に『妃』気取りでいらっしやるようだ」とヒソヒソされる未来しか見えねえよ……。

そんな、心無い人々からヒソヒソされそうなドレスを着せてもらい、髪も綺麗に結んでもらい、時間までを過ごす控え室へと案内された。

とはいえ、あと一時間程で入場となるのだが。始まってからトイレ行きたくなったりしないように、お茶なんかもあんまり飲めないし……。何しとればええんやろか。

そんな事を考えつつ控え室に入ると、中では父と兄がボケー……としていた。……お二人とも、もうちょっとキリつとしといてくださいよ……。何でそんなにボケーつとしてるんですか。

「旦那様？ どうされたのですか？ お口から魂が飛び出てらっしゃいますよ」

くすくすと笑いながら言うお母様に、お父様は「ああ……、うん……」とやはりぼんやりとした返事をしている。

本当にどうなさったのか。

お母様はお父様のお隣に座られ、さて私も座るかな……と思ったら、お城の侍女さんがスツ

ルを持ってきてくれた。ドレスの形を崩さない為に、そこに座ってくれとの事だった。

へいへい、了解でござんすよ……と私がスツールに腰かけると、お父様が深い溜息をつかれた。……何すか？ もしや私がスツールに座るだけの動作に、何か粗相でもありましたか？

「つい先程までな……、陛下がこちらにいらしたんだ……」

……は？

「息子の我儘わがままでしかない婚約の申し出を受けてくれた事に感謝する……と仰せになられてな……」  
お兄様は未だボケーとしている。そのボケーとしている兄を見て、父は再度溜息をついた。

「そして、後日正式に殿下より申し入れがあるそうだが、ローランドを殿下の側近として登用したい……と仰せで」

側近!? この兄が!? ……あ、ローランドは兄の名前ね。

というか、中央の権力から程遠い距離の我が家には、とんでもなく縁のない話ばかりだ。そりやお父様もボケーとされるわ。

このさして広くもない部屋で、陛下と差し向かいとか……。ちょっとした拷問かな？

そんな事を考えていたら、誰かがドアをノックした。

ドアを開けて入ってきたのは、かっちりとした服装の男性だった。パーティーの参加者というより、お役人みたいな感じだ。

「失礼いたします。セラフィーナ様が今日お着けになるアクセサリをお持ちいたしました」

そういえば。

ドレスは着付けてもらったし、髪もきちんと結ってもらったし、頭にはクリスマス様からいただいた髪飾りも着けてもらったのだけれど、アクセサリーはまだ着けていなかったのだ。

侍女さんのお話では、何やら「準備に少々手間取っております」とか何とかだった。

準備に手間取るアクセサリーってなんや？

部屋の中に居た侍女さんが、男性からアクセサリーのケースを受け取るうとしている。……のだが、侍女さん、何でいきなり手袋なんてし始めたんですかね……？ ていうか、ケースをここまで持ってきた男性も、しつかり白手袋を嵌<sup>は</sup>めている。いや、男性の手袋はもしかしたら制服的なものかもしれないが。

手袋を嵌めた侍女さんは、男性から恭しい動作でケースを受け取った。……いや、何か怖くね？ 持ってきてくれた人も侍女さんも、扱う手が異常に慎重じゃね？

侍女さんは受け取った箱を、テーブルの上にそっと置いた。ものつすごく慎重な動作だ。

「そちら、クリストファー殿下よりセラフイーナ様への贈り物となっております。お帰りの際にお待ち帰り下さい」

また贈り物!!

私が今着てるこのドレスも、クリスマス様からの贈り物なんだそうだ。ドレスだけでも幾らすんのおよ!? ってレベルのお品なのに、更にアクセサリーまで!! 何でそう私なんかには、じゃんじゃかお

金突っ込むのよ!

侍女さんがケースの留め金を外し、細心の注意を払っているかのような慎重な手付きで蓋を開ける。

中には何が……と、思わず家族全員で覗き込んでしまった。

そして全員でポカーンとしてしまった。

中身はアクセサリーがセットになった、所謂『パリエール』というものだ。恐らく私の年齢を考慮してのものなのだろう、全てが小振りな品物なのだが、細工が凄まじく精緻で豪華だ。

「クリストファー殿下よりセラフィーナ様へ、パリエールの贈呈となります。内容はティアラ、イヤリング、ブローチ、ネックレスの四点です。こちら、目録になります。どうぞご確認下さい」

男性は事務的に言うと、父に封筒を差し出した。受け取った父に、男性がにこっと微笑み丁寧にお辞儀をした。

「申し遅れました。わたくし、王城宝物庫管理局の局長を務めておりますマクブライトと申します」

……は? いや、待って……。『宝物庫管理局』って言ったよね……?」

王城の宝物庫ったら、数ある国宝が眠る場所よね? そのの、管理局長様? マジで?

管理局長様から目録を受け取った父が、それを確認している。が、めっちゃ顔色が悪い。お父様……、そこに一体、何が書かれているんでしょうか……?」

見るからに高価そう——というか間違ひなく高価なお品なのだけれど、それだけで父の顔が蒼白になったりはしないだろう。一体、どんな恐ろしい事が書かれているのか……。

「……『精霊の石』」

ぼつつと父の零した言葉に、家族全員が「は？」となった。

父は目録から目を上げると、私たち全員を一度見回した。そして、手にしていた目録をテーブルに置いた。

「ネットワークスのトップに使用されているのは、『精霊の石』と、書かれている……」

「はああ!?!」

私と兄の絶叫だ。母は口元に手を添え、目を見開いている。言葉にもならないくらい驚いているようだ。

それもそうだ。

父の言った『精霊の石』とは、世界にたった一つしかない、伝承に登場するような宝石だ。お伽<sup>おとぎ</sup>噺<sup>ばなし</sup>のような伝説に登場する石で、その逸話故に『国宝』と指定されている宝石だ。

というか、国宝なんだよ!! 国の宝が、何でこんなところにあんだよ!!

「そちら、現在の所有者はセラフイーナ様になっております。保管上の注意事項等はこちらに」

言いつつ、管理局長様はまた何かの紙片を父に手渡した。

受け取る父の顔色がほぼ土気色だが、きつと私も似たようなものだろう。

『高価そう』とかいうレベルじゃない代物がきちまったぜ……。これ、ガチで『値段が付けれない』品物じゃねえかよ……。何してくれてんだよ、王太子……。そら、持ってくる局長様も受け取った侍女さんも、手袋嵌めるわな！

管理局長様と父とで内容物と目録に相違がない事を確認し、受領の書類に父が溜息をつきつつサインし、局長様は「一仕事終えた！」と言わんばかりの晴れ晴れとした笑顔で去っていった。国宝を他者に贈るまで管理……。など、局長様もさぞ重圧があったのだろう。……。その重圧が今後、そのままそっくり我が家にかかってくる事になるのだが。

侍女さんにめっちゃ慎重な手付きでネックレスを着けてもらい、揃いのイヤリングも着けてもらった。

……。精神的な重さで、首もげそう……。マジで、何考えてんだ、王太子よ……。

開始時刻が近付き、両親と兄は会場入りする為に居なくなってしまった。

パリエールの残りの品物とケースは、侍女さんが「お帰りになられるまでは、こちらで保管いたします」と何処かへ持って行った。……。お帰りの際にも、渡してくれなくて大丈夫ですよ……。どうぞお城の宝物庫で保管しといて下さいな……。

開始十分前になり、私が一人ぼつんと待つ控え室に、クリスマス様がやって来た。

事前に何度か、打ち合わせやリハーサルのような事をしている。その際にクリスマス様に「私が来たからと、いちいち札の姿勢を取る必要はないよ」と言われている。……とはいえ、棒立ちつてのもの……と、一応ぺこっと会釈を試してみた。

その私に、クリスマス様は目を細めるように笑った。

「やはり、良く似合っている」

え、どれが？ 何が？ この『身分不相応』という言葉が相応しいドレスが？ それとも、意味分かんねえ国宝ネックレスが？

色々「???」となっている私に、クリスマス様はやはり笑顔だ。しかもめっちゃ優しい、相変わらずの激高好感度な笑顔だ。

その笑顔で、私に向かって手を差し出してきた。

「さあ、行こうか、セラ」

「……はい」

よく分からんながらも返事をし、クリスマス様へと歩み寄り、「さて、この差し出された手は、どうするのが正解なのか……」と迷ってしまった。

まあ普通に考えたら、エスコートの体勢だわね。男性が軽く曲げた腕に、女性が手を添える……というアレだ。けれど、私とクリスマス様の身長差を考えてみて欲しい。

# セラフィーナちゃん、今日のファッションチェック

## ネックレス

真ん中に贅沢に国宝をあしらった、意味分からん一品。クリスマス様からの貰い物。

## 髪飾り

王太子の象徴であるダリアの意匠の、独占欲丸出しな豪華なお品。クリスマス様からの貰い物。

## イヤリング

ネックレスと揃いのデザインのムダに豪華なお品。クリスマス様からの貰い物。

## 今日の猫ちゃん

つやつや・ふさふさで、ベストコンディション。

## ドレス

王太子妃の象徴である蔓薔薇をふんだんに刺繍した、意味分からん一品。クリスマス様からの貰い物。



現在十三歳のクリスマス様は、百六十センチくらいだろうか。少年らしい、線の細いすらりとした体型だ。対する六歳の私は、百二十センチもない。クリスマス様と並ぶと、私の頭がクリスマス様の胸元……くらいの差がある。

その身長差のおかげで、ダンスもなしになったのだ。エスコートの姿勢も、ダンスのホールドと似たり寄ったりで不格好になる筈だ。

……と思っていたらば、すぐそこに居たクリスマス様が、めっちゃ自然な動作で私の手を取ってきた。「エスコートの姿勢だと少々不格好になるから、今日はこうして手を繋いでいても構わないだろうか？」

あ、成程<sup>なる</sup>。そういう事ね。

「はい。……今日は、どうぞよろしくお願いいたします」

今日の為に念入りにブラッシングしてきた猫ちゃんを被り、クリスマス様にしずしずと頭を下げる。今日の猫ちゃんも、いい仕上がりだぜ……。



さて、婚約披露のパーティーが始まって、一時間ほど経過した訳だが。

クリスマス様がマジで全然、手を放してくれない。

何かね、会場入った時点で「うん？」とは思ったのよ。

クリスマス様と私はまず、壇上で来場者からのお祝いの言葉を受ける、という手筈てはずになってただけどさ。一段高くなった場所に、何故か長椅子があるんだよね……。

リハーサル時点だと、フツの椅子が二脚並べられてた筈なんだけど。長椅子で……。

入場して、クリスマス様、私の順に簡単な挨拶をする間もずーっと、手をガッチリギッチリ握られてた。……ていうか、礼する時くらい離して下さいよ……。

そして長椅子に着席……したはいいが、クリスマス様の距離が近い。そこでやっぱ、手は握られたまままだ。

……挨拶に来る方々が皆、ガッチリ繋がれている手を見て「わあ……」みたいな表情になられていた。心中、お察しいたします……。

なんかもう、手を繋いだまま椅子に座った時点で、猫ちゃんが大分やる気をなくしたよね。ていうか、壇上の一脚しかない長椅子を見た時点で、猫ちゃん大あくびだよ。

さてさて——、ここで今一度、今日の私の装いを確認していただきたい。

全身、クリスマス様から贈られたお品だからである。

頭には『王太子の象徴花』の髪飾り。しかも色は私の目の色に合わせた緑。ドレスはグリーンから青へのグラデーションに、金糸で『王太子妃の象徴花』の刺繍。このグリーン・青・金はクリスマス

様の色だ。金の髪に、光の加減で青や緑が混じって見えるハイゼルの瞳がクリス様だ。全部混ぜたら、このドレスになりまあつす、みたいな。……勸弁してくれ……。

そして最も勸弁して欲しい、国宝ネックレス。ネックレスの中央に鎮座ましましておられるのが、我が国の国宝『精霊の石』だ。——なのだが、ぱつと見でそれと分かる人は少ないだろう。何と言つても、見た目は普通の寶石だ。よおーく見ると、ちよつとだけ「アレ？」となるかもしれないが。そしてネックレスには、色合いのよく似た石が他にも幾つか使われている。そちらは普通の寶石だ。ガン見でもしない限り、中央のデカイ石だけが『普通の寶石』ではない……など、気付かないだろう。

そして、気付いたとしても、おいそれと指摘は出来ない筈だ。

何と言つても、物は『国宝』なのだ。しかもこの石はその来歴からして、世界に二つとない品物であるのだ。それをそれと指摘するといふ行為は、痛くない腹を探られる事にもなりかねない。

つまり、『これが真に国宝なのだとしたら、それを質してどうするつもりだ？』といふ事だ。

他者の手に渡る事に不都合があるのだとしたら、それは何故だ、と問われる事になる。「あなたはこの石に、何か用でもあるのか？」と。

それに、『国宝を他者に移譲する』という行為は、そう簡単に出来る事ではない。それなりの正当性やら何やらが必要だし、何より国王陛下の承認が必要なのだ。

陛下が承認した事に異を唱えるのか？ という事にもなってしまう。

……ていうかマジで、六歳児にそんなモン贈らないでくれませんかねえ……。

まあ今日の私の装いはそういった感じで、『ワタクシ、王太子妃ですけれど、何か文句でも?』という雰囲気バリバリなのだ。

ちゅうかこのネットクレス、石の正体に気付かなかったとしても、豪華すぎてあり得ねえレベルの品物なのよ……。

そんな『婚約が決まったばかりの六歳児』にはあり得ない装いの私に、案の定で嫌味を言ってくるマダムがいらした。……勇氣ありますね、マダム。

「カムデン侯爵令嬢は、素敵なドレスをお召しでいらっしやいますのね」

めっちゃひんやりした笑顔だ。マダムがお美しい方ではあるから、無駄に凄味すこみがある。

「ですがまだ、そのデザインは少おしばかり早いものではありません? もう少し大人になられてからお召しになられては如何いかですかしら。……尤もつとも、ご成長された侯爵令嬢様が、どのような意匠をお好みになられるかは、わたくしでは考えも及ばぬ事でございますけれど」

ウフフ……と、ひんやりとした含み笑い付きで、私としてはむしろ「マダム、かけえな!」という気持ちであったのだが。

マダムのお言葉を平らに分かり易く翻訳するなら「もう王太子妃気取りかよ。婚約者でしかないクセに。どうせ何年かしたら、婚約者でもなくなってるだろうに」という感じだ。マダムの被られている猫ちゃん、中々のつやつや加減っすね。見習いたいです。